

余市の人々。 第2回 【江部拓弥】

戦略推進マネージャーの連載を広報誌で掲載しています！

「余市の人たちには、長く続けていることが信用に繋がるんですね」

そう塩田さんは言う。とはいえ、100年である。これって、余市という町の事情？ それとも書店という商売ゆえのこと？ 塩田さん、どう思います？

「どっちもでしょうね。余市も本屋もちょっと変わってるでしょ。いい意味でも悪い意味でもね」

塩田さんの言いたいことは、なんとなくわかる。けれど、ちっともわからないような気もする。余市の風景と本屋の情景を思い浮かべると、僕の中では前者だな。なんとなくわかる、の方。本当になんとかだけけれど。塩田さんの「余市も本屋もちょっと変わってる」という言葉がごろごろと頭の中を転がっていく。

「私が塩田屋を継いで30年ちょっとになります。昔の人間ですから、長男が跡を継ぐことに何の疑問もなかった時代です。学校を出て札幌で働いてましたけど、父はいつかは私が帰ってくると思っていたでしょうし、私もいつかは余市に帰るものだと思っていました」

札幌で地図の販売会社で働いていた塩田さん、33歳のとき、余市へと戻ってきた。店を継ぐとか継がな

いとか、そんな話を先代とは一度もしたことがなかったという。そろそろかなと思って帰ってきて、いよいよだなど当たり前のように町の本屋の主となった。

塩田屋の建物は築60年。塩田さんが生まれた少し後に建てられたものだ。広さを訊くと塩田さんは「入口が四間で……」と独りごちながら「20坪ほどかな」。入って右手に雑誌の陳列棚、さらにその右にはコミック棚がある。「ようやく入ってきたんですよ」と、塩田さんは棚に並んだ『鬼滅の刃』を指した。その横には『余市町史』全6巻が陳列されている。考古の時代から平成までの余市の歴史を役場の町史編纂室がまとめたものだ。4年前から刊行が始まり、昨年に出揃った。扱っている書店は、塩田屋だけだという。店の左側は文房具、奥は印鑑や熨斗袋で占められている。すっきりと整った店内を見渡すと、書籍や文庫本の姿がほとんど見当たらないことを知る。

「書籍や文庫は少ししか置いてないんです。同心ものがちょっとあるくらいで、あとは配本で入ってくるものだけです。以前は私の趣味で書棚をつくったりもしていた時期もあったんですよ」(続く)

※「余市の人々。」は、余市町戦略推進マネージャーの江部拓弥（えべたくや）さんが、余市町に関わりのある人物へのインタビューをもとに執筆し、「WE B本の雑誌。」(<https://www.webdoku.jp/column/ebe/>)に掲載されているものを、転載しております。※掲載日 2020. 8. 31

問合せ 企画政策課 企画グループ ☎21-2117

ご協力願います

余市IC開通により、大型連休等に道道登余市停車場線（通称 登街道）で交通渋滞が生じています。町では関係機関と渋滞解消対策について協議を進めておりますが、その一環として、8月7日から8月15日までの9日間に黒川8丁目交差点（海鮮丸さん前の交差点）の渋滞解消に向け、下記のような誘導看板を設置する取り組みを行いますので、町民皆様のご理解・ご協力をお願いします。

